

九鬼周造記念講演会「九鬼周造の人生と哲学」コメント

著者	長岡 徹郎
雑誌名	心の危機と臨床の知
巻	21
ページ	114-117
発行年	2020-03-20
URL	http://doi.org/10.14990/00003553

- (4) 同上、VI・三三九。
- (5) 『現代フランス哲学講義』VIII・二九。
- (6) 同上、VIII・一三一―一四。
- (7) 『哲学私見』、『人間と実存』III・一一一。
- (8) 『岡倉寛三氏の思出』V・二三五。
- (9) 同上、V・二三四―二三五。
- (10) 同上、V・二三五。
- (11) 『根岸』V・二二八。
- (12) 『岡倉寛三氏の思出』V・二三七。
- (13) 高橋真司『九鬼隆一の研究——隆一・波津子・周造』（未來社、二〇〇八年）一五九頁。
- (14) 『岡倉寛三氏の思出』V・二三七―二三八。
- (15) 『短歌ノート』別・二五三。
- (16) 詳しくは、拙著『偶然と運命——九鬼周造の倫理学』（ナカニシヤ出版、二〇一五年）を参照されたい。
- (17) 『偶然性の問題』III・二六〇。
- (18) 『ミランダ王の問い（一）』中村元・早島鏡正訳（平凡社、一九六三年）一八一頁をもとに、引用者が要約。
- (19) 『報道ステーション』（二〇〇六年六月二十日放送）。放送は直接確認することができなかったため、以下のインターネット記事で参照したが、それも現在は削除されている。<http://blogs.yahoo.co.jp/bmb2mb413/19132647.html>（二〇一二年三月三十日閲覧）。
- (20) この点については、拙稿「苦しみの意味と偶然性——九鬼周造の

- 偶然論再考」（『人文学の正午』第三号、京都大学文学研究科二十世紀研究室、二〇一二年）や拙著『看護学生と考える教育学——「生きる意味」の援助のために』（ナカニシヤ出版、二〇一六年）において、若干の考察を行なっている。
- (21) 前掲拙著『看護学生と考える教育学』二九六頁以下、参照。
- (22) 松本創『軌道——福知山線脱線事故 JR西日本を変えた闘い』（東洋経済新報社、二〇一八年）三三三頁。

本研究はJSPS科研費17K13972の助成を受けたものです。

九鬼周造記念講演会

「九鬼周造の人生と哲学」コメント

長岡 徹郎（京都大学 非常勤講師）

本コメントでは私の関心である西田幾多郎（二八七〇―一九四五）や西谷啓治（一九〇〇―一九九一）、上田閑照（一九二六―二〇一九）らの哲学を導きとして、古川氏のご講演に対して二

点の質問を提示する。そのためにまず古川氏の九鬼解釈を確認し、次に九鬼の考える「偶然の必然化」への二つの方向の検討から九鬼哲学の問題点について考察する。

まずはご講演や古川氏の諸論考も参考にしながら、古川氏の九鬼解釈の要点について確認する。古川氏によれば従来の九鬼研究では、必然性から解放して自由な生き方をもたらす積極的なものとして九鬼の偶然論を解釈する傾向があった。しかしこの九鬼理解は、九鬼の偶然論の背景にご講演で詳しく紹介されていた青少年時代の数奇な体験があることを見落としている。なぜ与えられた現実が「この」現実であるのか、そしてその現実をいかに受け入れることができるのかという、自らの不幸な

生い立ちに苦悩する九鬼自身の実存が、「暗黒なもの」として九鬼哲学には含まれているのである⁽¹⁾。そうであるならば、偶然性の乗り越えという道徳性の強い実践哲学として九鬼哲学をみなすことができるのではないか。古川氏はこのような見出しのもと、偶然性のみならず時間論、芸術論といった様々な要素からなる九鬼哲学を包括的に解釈することを試みられている。このような立場からご講演で古川氏は、病氣や事故、自然災害といった突然の「不幸な偶然」に焦点を当てることでみえてくる九鬼の偶然論の意義について説明された。不幸な偶然に見舞われた時に私たちは「なぜこのような目に逢わなければならぬのか」という「なぜ」という「目的」を問うことでその苦

しみに「意味」を見出し、過酷な現実を受け入れようとする。では、もしあらゆる意味づけさえも拒むような厳しい現実に見舞われたとするならば、私たちは、現実が突きつける無意味さに耐え忍びながら、偶然を必然化することなく「偶然を偶然のままに」生きるしかないであろうか。このような過酷な偶然をも必然へと転換し得るのかという切実な問いに答えるための手がかりを、古川氏は九鬼の偶然論に見出そうとしているのである。このような意味において、九鬼は「ニヒリズム」という問題と対峙した哲学者とみなすことができると、古川氏は指摘している⁽²⁾。

九鬼の「偶然の必然化」への試みの萌芽は、まずポンティニーの講演において示された「回帰的時間」から解脱するための二つの方向に見出すことができる。一つ目の方向は、一切の意志的なものを捨て時間そのものを消滅させる「仏教的」な方向であり、二つ目の方向は、無限に繰り返していく同じ労苦を無限に引き受けていくという「武士道的」な方向である。九鬼が重視したのは後者の方向であった。与えられた偶然の現実を単なる偶然のままやり過ごすのではなく、実践において「遇うて虚しく過ぐる勿れ」という命令に込められることで、偶然を必然化して運命を引き受け、生きることの無意味さ(ニヒリズム)にさらされている人間を救い出す。このような「偶然の必然化」という九鬼の実践哲学が大きな説得力をもつことは、ご講演で

紹介された二つの事例をもって示されたように思える。

一方において、九鬼は仏教的な方向をそれほど展開しなかったようにみえる。しかし、受け入れることのできないほどの過去の不幸を運命として引き受けるためには、意志的なものを捨てて、別の言い方をすれば過去の自分からの転換（諦め）が必要との見方も可能であろう。古川氏はご講演で「運命」とは、予め定まったものとして「ある」ものではなくて、人間の意志と行為によって「なる」ものである」と述べているが、果たしどこまで「意志」で押し通すことができるのであろうか。

上田は意志とは異なる自己の「脱自」的な転換の有様を以下のように述べている。「事実につづかるということは、何とも言いようのないもの（こと）に出会うこと、今までの理解された自分の世界の枠を破るようなものにつづかること」であり、このような「痛い目にあう」ことによって、自分自身が新しくなり、広い世界が新しく開かれてくるという。「経験は一種の脱自性ということで成り立っていて、その意味で、経験ということ自身にすでに或る種の宗教性がある」³。不幸な過去を受け入れた人々には、「事実とぶつかる」という体験によってそれまでの自己が否定され、「自分自身が新しくなる」という何かしらの「脱自」的な自覚があったのではないだろうか。

上田に限らず、西田や西谷といった京都学派の哲学者たちは、「意志」の限界を探ることで自らの哲学を構想しようとした。

田辺元（一八八五―一九六二）による九鬼の博士論文への「有に對立する絶対否定的普遍（神秘主義にいふ無）が對立的に現れそれが道德法の内容を充たすといふ様な否定的超越的合目的性でない様に感ぜられます」⁴という質問は、この問題を反映している。「有に對立する絶対否定的普遍」、つまり西田が「絶対無」として考えたような意志をも超えた方向から、偶然性について再検討すべきであることを、田辺は指摘している。

しかし、私は仏教的な方向が正しく、九鬼の武士道的な方向を否定したいわけではない。意志そのものを否定する仏教的な方向は高踏的ともいえ、実践からすれば自らの意志によって偶然を必然化することの方が現実的と言えるだろう。しかし、偶然性の孕むニヒリズムは、運命を引き受ける人間自身をも無意味とするような深刻さを潜めている。西谷は主著『宗教とは何か』において「我々が何のためにあるかといふ問題が起ることは、我々の存在の根底から虚無が現れて来て、其處から我々の存在そのものが我々自身に疑問符と化する」⁵と述べている。偶然への問いがその問いそのものを発する自己への問いとして深められた時、私たちは自らが、自分から自身の存在根拠を見出すことのできない虚無的な存在であることを知るのである。そのような武士道的な方向による必然化をも拒む局面において、意志的な自己そのものを諦める仏教的な方向が求められてくるのではないだろうか。

ただし、その点について古川氏はご自身の論文で興味深い言及をしている。「九鬼が最初に説いた「いき」という「生き方」から、晩年に説いた「自然に生きる生き方」に至るまで、その基礎に置かれている契機の一つは「諦念」にほかならない」と指摘し、「偶然的必然化」という未来的な側面（武士道的な方向）に加えて、必然性への諦念という過去の側面を視野に入れることによって九鬼の倫理的態度は初めて完成されると述べている⁽⁶⁾。確かに論文「日本的性格」において「諦念」が「自己の無力を自覚すること」であるとされるが、九鬼はこの点をどのような形で展開したのであろうか。私見ではあるが、ご講演であまり踏み込まなかつた九鬼における美の問題が、この点と関係しているように思われる。九鬼の耽美的な人生観には「偶然的必然化」と「諦念」との不思議な出会いが果たされているのではないだろうか。

以上をまとめると、質問事項は以下の二点となる。一点目は、九鬼はなぜ仏教的な方向についてあまり言及しなかつたのか、ということ。二点目は一見すると未展開であるように思われる仏教的な方向は、「諦念」として九鬼の美の問題とつながるように思われるがどうか、ということである。

註

(1) 「胸に暗黒なものを有つて、暗黒のために悩まなければ哲学らしい哲学は生れて来ない」（九鬼周造『九鬼周造全集 第八卷』岩波書店、一四頁）。

(2) 九鬼の偶然論をニヒリズムの問題として解釈する古川氏の論考として古川雄嗣「苦しみの意味と偶然性 九鬼周造の偶然論再考」『人文学の正午』第三号、二〇一二年、一〇七—一三七頁、古川雄嗣「偶然性を通しての偶然性の克服 九鬼修造におけるニヒリズムの克服」『京都大学大学院教育研究科紀要』第五四号、二〇〇八年、七一—八三頁が挙げられる。

(3) 上田閑照『上田閑照集 第二卷 経験と自覚』岩波書店、二〇〇二年、六頁。

(4) 「八資料」田辺元・九鬼周造往復所感 博士論文『偶然性』をめぐって『九鬼周造全集 月報二二』岩波書店、一九八二年、一一頁。

(5) 西谷啓治『西谷啓治著作集第一〇巻』創文社、一九八七年、七頁。

(6) 古川二〇一二・一三〇頁。